

# 戦後80年 明日へ伝える昭和の戦争



昭和19年宗賀国民学校にて戦没者の慰霊を迎え、校庭での葬儀の様子  
(市政60周年「昔の塩尻の写真」収集にて集めた写真より)

塩尻市中央公民館



## はじめに

塩尻市中央公民館では、2025年に戦後80年を迎えるにあたり、戦争の悲惨さを記録し、次世代に受け継いでいくため、戦争にまつわる体験談等(戦争時の様々な体験、学童疎開、親や祖父母から聞いた話等)を2021年から募集しました。

募集開始後、塩尻市内外から10名の方からご連絡があり、直接聞き取りや資料提供していただきました。ご提供いただいた内容を戦後80年にあたる今年、冊子にまとめることといたしました。

この冊子を通じて、戦争の悲惨さとかげがえのない平和について改めて考えるきっかけになりますと幸いです。

ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

この冊子は、市内10地区公民館、塩尻市立図書館にも置いてありますので、ご活用ください。

塩尻市中央公民館

# 目次

- 狂気と絶望の満州 . . . . . 1
- 涙を流して食べたカレーライス . . . . . 2
- 命が軽んじられた時代 . . . . . 4
- 終戦、そして独立戦争へ . . . . . 6
- もうゆっくり眠れる . . . . . 9
- 戦陣回顧録 . . . . . 10
- わいこっぼがもどってきた . . . . . 13
- 藁草履で通った小学校 . . . . . 14
- 洗馬駅で見た紙吹雪 . . . . . 16
- 闇船での脱出 . . . . . 18

# 狂気と絶望の満州 ～同胞を売る悲劇と生きるための略奪～

おかやす さくえさん  
東京都江戸川区在住  
聞き取り日：令和3年5月10日  
電話にて（新聞記事を見て連絡）

私は3歳の時から、両親と兄3人、姉、妹の大家族で満州（現在の中国東北部）で暮らしていました。父は満州軍の宿舎を建てる建築の仕事をしており、私も平らな貨物車を作る使役（労働）に駆り出されたりしていました。

戦況が悪化し、私たち民間人を守るはずの関東軍が南へ下っていく（撤退していく）のを見た時は、「見捨てられた」と本当にゾッとしました。

終戦を迎えた満州はまさに地獄で、あまりの絶望に精神的におかしくなる人が続出しました。ちょうど父が建設に関わった3階建ての学校が完成し、そこへ北から逃げてきた大勢の避難民が収容されました。

人が次々と亡くなっても、棺桶すらありません。姉が亡くなった時も、父が木切れて手作りの棺桶を作りました。兄がそれを引っ張り、せめてもの弔いにと姉が好きだった服を被せて見送った光景は、今も目に焼き付いています。

当時の治安は最悪で、父から「女は外に出るな」と厳しく言われました。生きるためにアメリカ兵に体を売る女性や、日本人の男が同胞の女性をロシア兵に売って仲介料を稼ぐようなことまで起きていたのです。女性の誘拐も珍しくなく、生き延びるために中国人の奥さんになった人も大勢いました。きれいごとなんて言ってられません。私たちも生きるのに必死で、道端の軍人の遺体から金目の物を盗むことさえありました。

日本へ引き揚げる時は、派手な着物や金目の物を地味な布に隠し、命がけで逃げ延びました。その後、なんとか日本へ帰り着き、中学生の時に松本市の岡田に移り住みました。大人になって岡田村役場に就職し、その後東京へと移り住んで今に至ります。

満州での凄惨な経験と、生きるか死ぬかの極限状態で味わった苦労は、間違いなくその後の私の「我慢強さ」に繋がっています。あんな悲劇は、二度と繰り返してはなりません。

# 涙を流して食べたカレーライス ～戦時中の食糧難を生き抜いて～

高橋 忠人さん（昭和10年生まれ）  
塩尻市広丘吉田在住  
聞き取り日：令和3年4月21日

私が子どもの頃は、上諏訪町（現在の諏訪市）に住んでいました。7人兄弟の長男で、六畳二間の長屋に家族みんなで暮らしていたんです。父は出征していて不在でしたから、毎日の食事を用意するだけでも本当に大変な時代でした。

当時の食事といっても、「すいとん」が出ればまだいい方です。普段は、摘んできた草を混ぜて炊いたご飯で、米粒なんてほんの少ししか入っていませんでした。学校から帰ると、食料を確保するために「びく」を背負って、競馬場や川の土手へ出かけ、毒草以外なら何でも摘みました。道端のよもぎも貴重な食料でしたが、どの家も食べるものがないから、あっという間になくなっていました。

戦争が激しくなるにつれて、食べ物はどんどん底をついていきました。配給もありましたが、それすら抽選で、お腹を満たすような量はもらえません。学校で使うものも抽選でした。

近所では、あまりの飢えに拾ってきた犬を食べて体を壊し、亡くなってしまった方もいたほどです。私たち家族も、畑に植えてあったイモの取り残しを拾って食べたことがありますが、イモの表面が青くなっている。家族全員が下痢と嘔吐に襲われ、本当に大変な目に遭いました。

食べ物がなくて、近所の人たちは、着物などを持って物々交換に出かけていました。私たち家族も最初は近場の岡谷や辰野へ行っていましたが、休みの日には2歳上の姉と朝4時に起きて、霧ヶ峰まで歩きました。リュックいっぱい「コーレ（うるい）」という山菜を詰めて帰って、それを家族で食べたものです。

一番忘れられないのは、姉と二人で塩尻まで買い出しに行った時のことです。上諏訪駅から汽車にりましたが、当時は往復切符を買うのすら難しく、片道分しか売ってもらえませんでした。夕方5時頃に塩尻駅に着いて、帰りの切符を買おうとしたらもう売り切れ。仕方なく、翌朝売り出される切符を買うために、凍えるような寒さの駅舎で寝て待ちました。

翌朝、切符を確保した後、物々交換のために宗賀や洗馬の方面へ歩きました。岩垂あたりの集落を1軒ずつ回って、「着物と食料を交換してください」とお願いして歩いたんです。でも、どこも断られてしまって。中には「家畜の飼料用の干しとうもろこしでもいいから」と頼み込んでも、ダメでした。

疲れ果てて、道端に座り込んでしまいました。それでも最後の力を振り絞って、一軒の小さな平屋を訪ねたんです。すると、そこから出てきたおばあさんが、「うちには何もないけれど、ちょうどお昼時だから、お昼を食べていきなさい」と声をかけてくれました。出してくれたのは、なんと白米とカレーでした。姉と二人、涙を流しながら食べました。世の中にこんなうまいものがあるのかと、心の底から思いました。おばあさんに何度もお礼を言ってから、また他の家を回ると、じゃがいもやサツマイモを交換してもらい、リュックがいっぱいになりました。夕方の汽車で塩尻駅を発ち、上諏訪へ帰りました。家に着くと、お腹を空かせて待っていた弟たちや母が、満面の笑顔で迎えてくれてね。あの時の嬉しさは、今でも忘れられません。こんな食料のない苦しい時期が、3年くらい続きました。

戦争が終わった日のことは、家の周りで近所の人たちと一緒に、ござの上に座ってラジオで聞きました。父は戦争が始まった頃は樺太にいて、終戦の年に栃木に着任していました。航空予備隊で滑走路の整備などをしていたそうです。戦争が終わってもなかなか帰ってきませんでしたでしたが、無事に家へ帰ってきた時は本当に嬉しかったですね。

その後、私が40歳くらいの時に、縁あって塩尻に引っ越してきました。その時、真っ先に岩垂のあたりへ行きました。あの時カレーをご馳走してくれたおばあさんにお礼を言いたかったんです。でも、あの小さな平屋の家は、もうどこにもありませんでした。

～子どもたちへ伝えたいこと～

今の子どもたちに伝えたいのは、「友達づきあいを大切にしてほしい」ということです。友達は必ず助けてくれます。

今は戦争中とは違い、とても恵まれた環境にあります。貧しくても、誰かが手を差し伸べてくれる可能性だってあります。だからこそ、人間関係などで悩んで、自ら命を絶ってしまう子どもがいるというニュースを聞くと、本当に悲しくてたまりません。

何か悩んでも、助けてくれる人は必ずいるはずですよ。戦時中は、生きたくても生きられない人がたくさんいました。どうか、自分の命を大切にしてください。

# 命が軽んじられた時代

## ～東京大空襲の惨状と、いところが語った白兵戦～

山田 通夫さん（大正15年生まれ）  
塩尻市金井  
聞き取り日：令和3年5月8日

私は栈敷の出身でね、6人兄弟の長男として生まれました。あの頃は、長野県出身の飯沼飛行士に強く憧れていて、一時は本気で「飛行士になりたい」と夢見ていた時期もありました。15歳になって進学を目指したのですが、家の経済的な事情もあって諦めざるを得ず、日立の亀有工場へ就職することになりました。そこは1,000人ほどの人が働いていて、私のように地方から出てきた若者が200人くらいはいたでしょうか。私たちはその工場で作っていました。

昭和17年のことです。昼間、工場の真上を敵の飛行機が通り過ぎていき、東京に空襲がありました。世間では「日本は勝っている」と言われていましたが、私は軍部に対して不信感を抱いており、「こんな状態で日本が戦争に勝てるわけがない」と、日に日に感じるようになっていました。それでも、当時は頭の良い若者は軍人になるのが当たり前の時代です。男子の8割以上が「軍人になりたい」と言い、女の子は「看護婦さんになりたい」と言う、そんな世の中でした。

やがて、あの恐ろしい東京大空襲が起きました。一晩で10万人もの命が奪われたのです。あまりにもむごたらしい遺体の山を前に、私は悔しくてたまりませんでした。さらに私を怒らせたのは、陸軍が遺体を処理する様子でした。彼らはスコップを使い、まるで物を扱うかのように遺体を荷台へと投げ込んでいたのです。あの光景は、今でも忘れることができません。

戦局が悪化し、兵隊が足りなくなった昭和18年12月、徴兵検査が繰り上げられました。私も19歳で検査を受け、合格しました。そして昭和19年5月1日、実家の親を通じて私の元にも召集令状、いわゆる赤紙が届いたのです。そこには「日時は追って伝える」と書かれていましたが、結局その後連絡が来ることはなく、私は戦地へ行く前に終戦を迎えました。

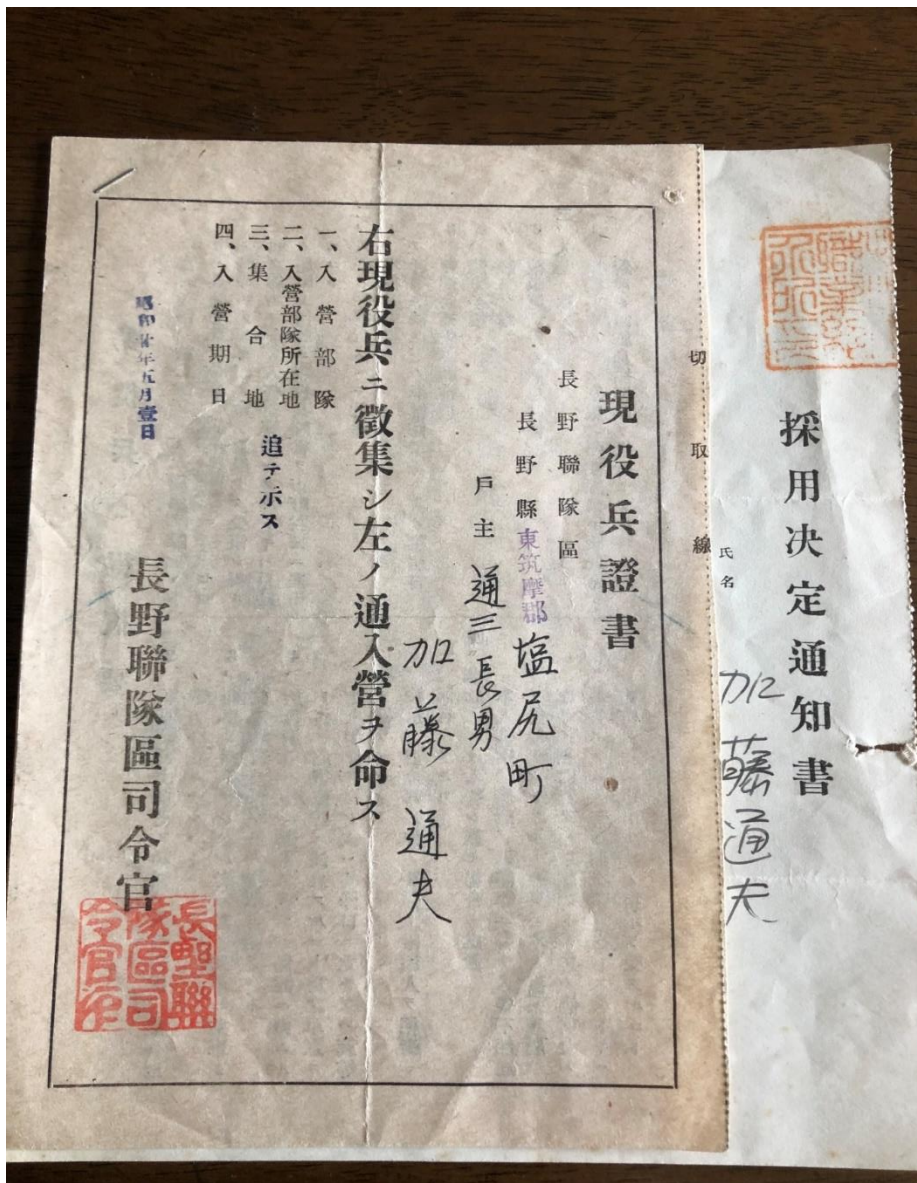
戦争というのは、本当に恐ろしいものです。日本の兵隊だって、戦地では悪いことをたくさんしました。いところから、一度だけ当時の話を聞いたことがあります。白兵戦で敵陣に突っ込み、彼は何人もの敵を殺したそうです。その時に聞いた相手の断末魔の声が、一生耳にこびりついて離れない。ふと夢に見てうなされることもあると……。普段は戦争の話など全くしない彼が、その時だけポツリと語ってくれた真実でした。

戦争とは、相手を殺すことが「手柄」になる異常な世界です。人の命を軽んじることが許される、そんな狂った状態なのです。だからこそ、どんな理由があろうとも、絶対に戦争をしてはいけません。

この悲惨な記憶を風化させることなく、子どもたちへ、そしてその先の後世へと語り継いでいかなければならないと、私は強く思っています。

<山田さんから資料提供いただいた一部を紹介します>

召集令状



# 終戦、そして独立戦争へ

～帰らぬ仲間と、故郷の悲劇を越えて～

赤羽 佳さん（大正14年生まれ）  
塩尻市広丘  
聞き取り日：令和3年4月30日

私は松本中学校を卒業した後、民間の航空パイロット養成所を目指していました。郷土の英雄である飯沼飛行士に強く憧れていたんです。しかし、戦況の悪化によって、念願の訓練を受けることは叶いませんでした。

そして18歳で出征することになり、昭和19年4月に福岡県の大刀洗（たちあらい）で日本陸軍に入隊しました。階級は陸軍軍曹でした。入隊後は、日本から台湾の高雄、ベトナムのサイゴン、そしてシンガポールへと、めまぐるしく戦地を移動しました。昭和20年の2月には、シンガポールに1ヵ月ほど滞在していましたね。

やがて終戦を迎えたのですが、私の戦争はそこでは終わりませんでした。滞在していたインドネシアで、オランダからの独立戦争に巻き込まれてしまったのです。私たちはすでに武器を持っていませんでしたが、軍隊の格好をしていたため、ジャカルタで強制労働に服することになりました。結局、昭和22年の1月までジャワ島に留め置かれることになったのです。

異国の地で、家族からの手紙も届かず、日本の家族の安否をずっと心配していました。後になって知ったのですが、終戦の年の9月から10月頃、地元で集団赤痢が発生し、私の母親と弟が亡くなっていたのです。遠く離れた地で家族の死を知った時の無念さと悲しみは、今でも言葉になりません。

当時、インドネシアの独立戦争には、何千人もの日本人が現地の軍隊に入って共に戦いました。バリ島には、現地で亡くなった日本人のお墓があります。かつて日本人がインドネシアの人たちに農法を教えていたこともあってか、現地の人たちは私たち日本人にとっても好意的でした。日本人が戦死すると、現地の人たちが立派な慰霊碑を建ててくれたほどです。日本へ無事に戻ってきてからは、亡くなった仲間たちの慰霊のために、毎年冬になるとインドネシアを訪れていました。

戦争で起きた様々な出来事は、決して目を背けることなく「事実」として後世に残していく必要があります。悲しいことですが、人間の歴史において、戦争というものはこれからもついてまわる問題なのかもしれません。だからこそ、知ってほしいのです。「戦争は、いとも簡単に人を変えてしまう」という恐ろしさを。二度と同じ過ちを繰り返さないために、私は真の世界平和を心から願っています。

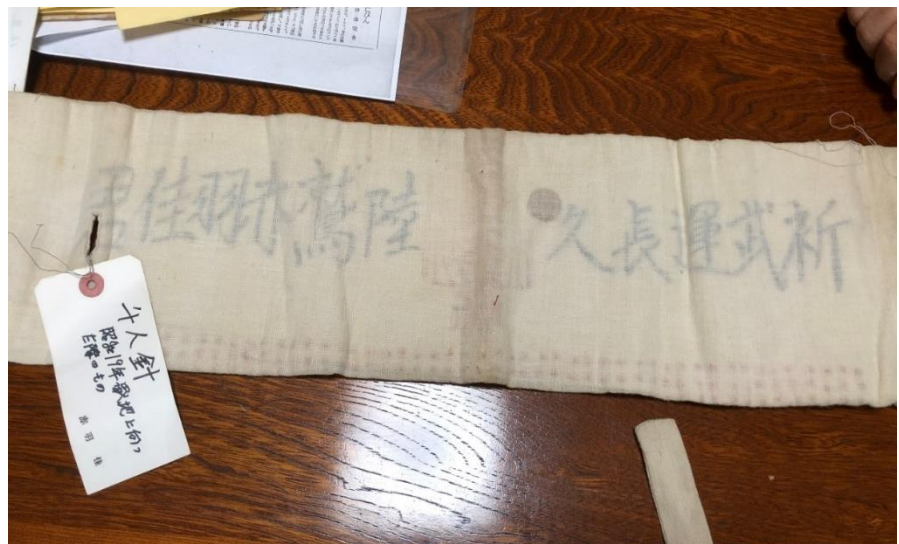
<赤羽さんから資料提供いただいた一部を紹介します>

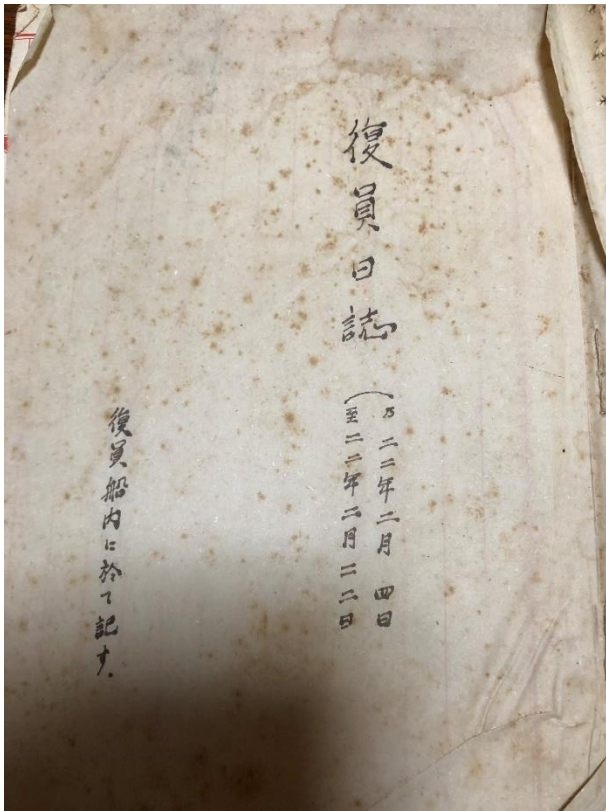


陸軍の階級を表わす階級章

### 千人針

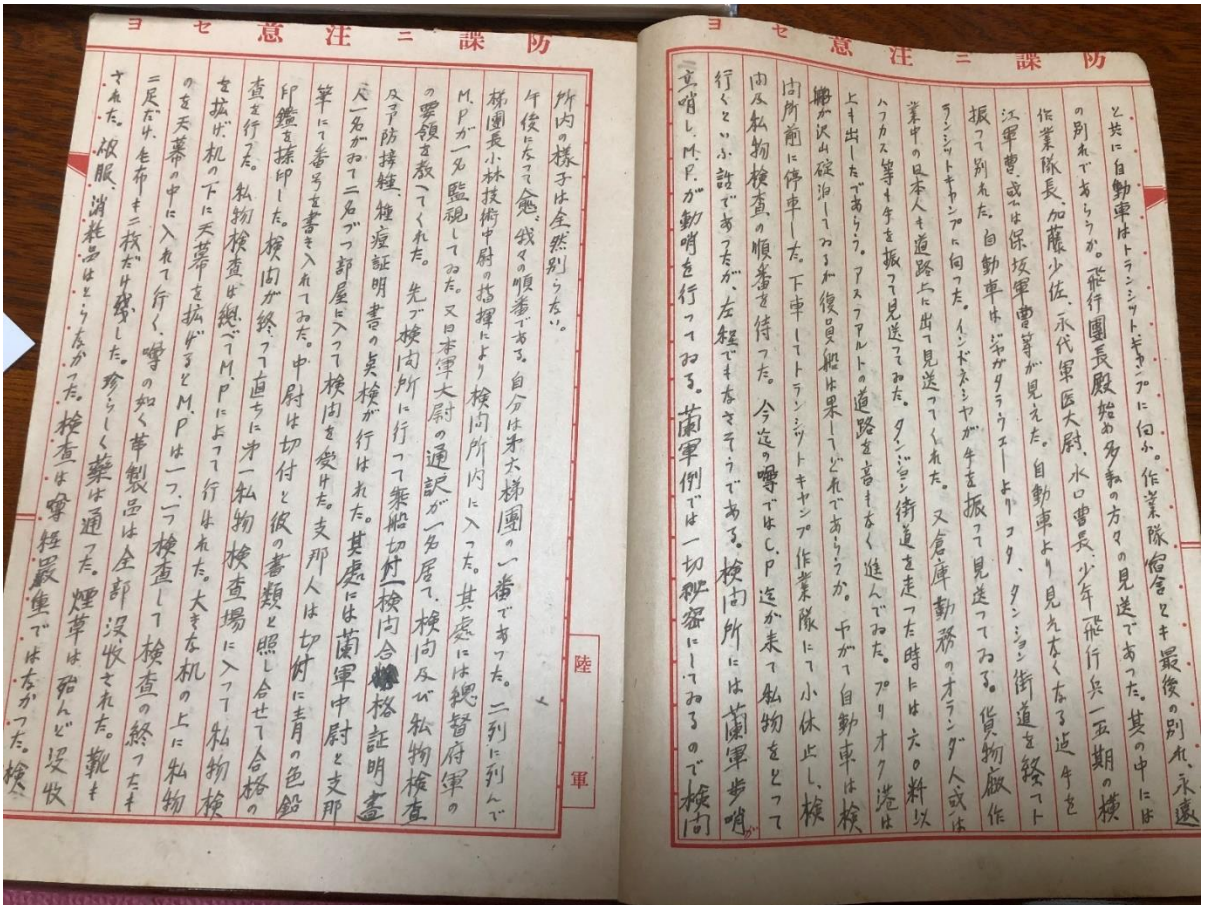
第二次世界大戦まで日本でさかんに行われた、多くの女性が一枚の布に糸を縫い付けて結び目を作る祈念の手法、および出来上がったお守り





### 復員日誌

復員とは戦争の終結に伴い、軍隊から召集を解かれて軍務を離れ、一般市民として故郷に戻った兵士のこと。赤羽さんが復員当時に記した日誌



# もうゆっくり眠れる

～空襲の夜を越えて、忘れられない五目御飯の味～

松野 喜美子さん（昭和4年生まれ）  
塩尻市広丘  
聞き取り日：令和3年5月10日

私は昭和9年に田川尋常小学校に入学し、昭和14年に名古屋へ転校しました。そして昭和18年、名古屋陸軍造兵廠（ぞうへいしょう）に就職することになります。私の家は、両親と、兄、姉、私、そして弟、妹の7人家族でした。しかし、戦争が私たちの家族をバラバラにしてしまったのです。兄は戦地へ赴き、昭和19年には両親と下のきょうだいたちは長野へ戻っていきました。姉と私は名古屋で就職していましたが、昭和20年になると姉も須坂へ転勤になり、とうとう私は、空襲の激しい名古屋の街に一人ぼっちになってしまったのです。

私が造兵廠に就職した一番の理由は、「食糧事情がよかったから」です。当時は本当に食べるものがありませんでしたからね。ただ、職場は常に憲兵が目を光らせていて、「敵のスパイはいないか」と厳しく監視される、とても息苦しい毎日でした。

当時の名古屋は大きな軍事施設がたくさんあり、何度も激しい空襲に遭いました。空を覆うB29の爆音は凄まじく、まるで雷が落ちたような恐ろしい地響きでした。空襲警報が鳴るとたくさんの人が逃げ惑い、防空壕に入りきれないこともありました。私はガスタンクの陰に身を潜めて、必死に難を逃れたこともあります。空襲の後の光景は、思い出すのも辛いものです。中川運河には、亡くなった方の遺体が数え切れないほど浮かんでいました。愛知の被害は本当に甚大で、私たちは生き残った者同士、励まし合ってなんとか生きていたんです。心の中はもう限界で、友達とはこっそり「早く日本が負ければいいのに」と囁き合っていたほどでした。

昭和20年8月15日。その日は、いよいよ私も疎開しようとしていた、まさにそのタイミングでした。終戦を知った時、私が最初に感じたのは「ああ、これでもう、今夜からゆっくり眠れるんだ」という深い安堵でした。空襲に怯えなくていい、その安心感の中で食べた五目御飯の味は、今でも忘れることができません。しかし、戦争が終わっても、戦地に行った兄は帰ってきませんでした。

私の4歳くらい下になると、もう戦争の記憶がない世代になります。今の子どもたちは、本当に幸せだと思います。だからこそ知ってほしい。戦争は、どんな理由があろうとも、絶対にやってはいけないのです。

## 戦陣回顧録 ～昭和9年入営から生還までの12年～

間島 由正さん（大正3年生まれ）

松本市

息子の松野のぼるさんから資料（日記）提供

日記より一部紹介

昭和9年、徴兵検査を受けて甲種合格した。明けて昭和10年1月、前夜から降り続く大雪のなか、親類や近所の方々の万歳三唱に送られて故郷を出発した。歩行も困難な雪道を若い人たちが踏み固めてくれ、軍歌を歌いながら駅へ向かった。汽車は雪で立ち往生したが、夕方には高田に着き、第五中隊第一内務班に配属された。

初年兵の日課は喇叭（らっぱ）の音に追われ、食事はただかきこむだけだった。班を出入りする時は姓名と行き先を名乗らねばならず、怠ると二年兵からやり直しを命じられた。教練から戻ると、整頓が悪い者の被服は木銃で突き落とされ散乱していた。また、便所で履き替え用の靴を履かなかつたなどの些細なことで二年兵から呼び出され、スリッパで顔面を殴られるなどの私的制裁を度々受けた。理不尽な暴力だが、これで不屈の精神を養うものとされていた。一週間ごとの兵器検査では小さな爪痕まで調べ上げられ、被服検査では員数合わせに苦労した。

入隊前に痛めた足の筋が悪化し、現役の間に階級は上がらなかった。除隊の折に上官から「どうしてお前は上等兵にならなかったのだ」と叱責されて赤面したが、この足のおかげで日支事変の召集を免れ、命を永らえたとも思っている。

昭和11年2月28日の夜、非常呼集がかかり戦時編成で駅へ向かった。東京で事件（二・二六事件）が起きたため、赤坂に駐屯し、しばらく巣鴨刑務所の監視についた。中には五・一五事件の主犯もいたという。

その後、帰休除隊となり、秋期演習に参加した。仙台の王城寺ガ原での師団演習はとにかく行軍が辛く、三日二晩、小休止と食事以外は歩き続け、二晩目には歩きながら眠るほどだった。ひたすら精神力で歩き抜いた。昭和13年には予備役召集を受けるも三週間で除隊した。

昭和16年7月、第一回目の戦時召集を受けた。戦火拡大による大動員である。当時、妻は病床にあって生死の境を彷徨っており、私がいなくなれば60歳近い両親とか弱い妹、2歳の長男と9ヶ月の次男だけが残される。弱い者ばかりのあまりにも惨めな家庭状況だが、戦争はそんな事情を斟酌してくれない。今生の別れと覚悟し、玄界灘の荒波を越えて朝鮮の羅南へ渡った。

幸いにも妻の病は癒え、内地から千人針やお守りの入った慰問袋が届いて深く安堵した。実戦はなかったが、演習は相当激しいものだった。白頭山のジャングル地帯を切り開く訓練や、水なしで山を登る訓練では落伍者も出た。冬の夜間演習では、凍り付いた川の岩場を歩き、滑り落ちて天皇陛下から授かった銃剣にキズでも付ければ営倉行きを覚悟しなければならない。零下23度にもなる雪中夜間演習では、散兵壕の中で動けずに足の凍傷になる者がたくさん出た。

昭和18年2月、無事に召集解除となって帰郷した。

昭和19年、二度目の召集令状が届く。戦局は既に非であった。銃後においても物資は窮乏し、農家でも米は供出させられ、代わりに豆粕を配給されて食べていた。女子供も竹槍訓練に励む有様だった。

新発田から石巻へ赴く途上、面会に向かっていた妻が持病で倒れ、危急のなか連れ帰る苦労もあった。12月、東京警備に就いたが、日本橋一帯はすっかり焼け野原となっていた。空襲警報が鳴り敵の戦闘機が来襲しても我が軍の機影はなく、敵機が去ると味方が出てきて飛び回る。完全な負け戦をただ見ているしかなかった。

昭和20年1月、支那派遣軍に編入され、遺言状と髪の毛、手の爪を故郷へ送って大陸へ渡った。南京、上海を経て南支那沿岸の警備に就く。移動の際は現地で苦力(クーリー)を集めるのだが、反抗して頑として動かなくなる者もあり苦労した。

南方では食糧が日増しに悪くなり、シラミや南京虫に悩まされた。たまにしか洗濯しない肌着にはシラミが卵を産み付け、蚊帳を吊っても蚊が入り込み、殆どの者がマラリアに罹った。私も悪性のマラリアと栄養失調に倒れ、40度を超える高熱でうわ言を言い、死を覚悟したが、辛うじて一命を取り留めた。

昭和20年8月下旬、終戦を知る。武装解除されて捕虜収容所へ移る道すがら、路傍には遺体が転がり、捨て子の泣き声が聞こえ、惨状は目を覆うばかりだった。収容所といっても幕舎で、飢えは深刻だった。飯粒一粒でも不公平の無いように分配せねばならない。酒や煙草欲しさに支給された被服を民家で交換してしまい、内地に帰る頃には着の身着のままの者もいた。窮地に陥って初めて平素の有難さを痛感し、ひたすらに故郷の家族を思った。

昭和21年4月、ようやく帰還の命令が下った。台湾、沖縄を通り浦賀に着いたものの、船内でコレラが発生し、55日間も下船を許されなかった。6月8日、ようやく召集解除となった。

上野駅で背囊を降ろすと貯金通帳を盗まれていたが、財布と切符は身に付けていたので無事に帰ることができた。焼け野原の東京を抜け、夜遅く我が家へ辿り着く。2年4ヶ月ぶりの対面は本当に嬉しかった。

しかし、長き戦陣の労苦と病で身体は極度に衰弱し、歯は傷んで歯茎だけとなり咀嚼も叶わない有様だった。総入れ歯にしてからようやく身体も順調になったが、人生の最も尊い働き盛りを、この戦争で費やし果ててしまったのである。

# わいこっぼがもどってきた -過去は繰り返さない-

服部 えつ子さん

安曇野市

聞き取り日：令和3年5月6日

作者の服部えつ子(降幡えつ子)さんのお父様の戦争体験について描いた絵本「わいこっぼがもどってきた」を提供いただきました。

絵本は中央公民館にあります。お読みになりたい際は、中央公民館までお越しください。



## 《あらすじ》

大正13年、鹿児島県に生まれた父、清は、祖父に厳しく育てられた。兵役の道が確実に迫っていたため、17歳の時に自ら志願して入隊した。翌18年、陸軍の戦車学校へ入校。フィリピン戦線でアメリカ軍との撃ち合いで重傷を負ったが、奇跡的に助かり、終戦後、日本へ帰国した。

『わいこっぼ(われこっぼ)』は、鹿児島弁で「悪戯坊主(いたずらぼうず)」や「悪ガキ」「わんぱくっ子」を意味する言葉です。

# わら草履で通った小学校 ～塩尻の子どもたちが見た戦争～

藤森 志展さん（昭和12年生まれ）  
塩尻市大門  
聞き取り日：令和6年4月15日

私は塩尻市の大門出身で、6人兄弟の長男として育ちました。家は魚屋を営んでいて、私が2、3歳の頃は、下西条や中西条のあたりへ行って物々交換でもらってきたものを食べていた記憶があります。4歳頃には、めぐみ幼稚園に通っていました。当時はまだ保育園などなく、20～30人くらいの子どもたちが通っていましたね。

私が小学校に入る頃、父に召集令状が来て軍隊へ行きました。幸い、父は1年ほどで無事に帰ってきて、また魚屋として働き始めました。

私は塩尻尋常高等小学校に通っていました。戦時中で危険だったため、登下校は集団でした。とにかく物資がない時代で、通学はわら草履か下駄、あるいは裸足です。わら草履すら十分な数がなく、学校の授業で自分たちで作ったほどです。長靴も支給されましたが、クラスに1つか2つしかなく、全く足りていませんでした。

小学校2年生の頃には、上空をB29が飛んでいくのを見て、本当に恐ろしい思いをしました。当時の学校の先生は、まるで軍人のように厳しかったですね。

今でも行われている「三九郎」は当時もありましたが、今と違って大人は一切手を出さず、子どもたちだけでやっていました。三九郎の中に大きな空洞を作って、そこに泊まれるようにしていたんです。道祖神のお祭りも子どもたちだけで行い、道に泥縄を張って通せんぼをして、通行人から「通行料」をもらって生活の足しにしていました。今では考えられないたくましさですよ。

小学校3年生になるといよいよ戦局が激しくなり、B29が何度も上空を飛ぶようになりました。私たちは授業中、東小学校の体育館からプールのあたりに、小学生が1人入れるくらいの穴をいくつも掘られました。それを防空壕代わりにしようというのです。しかし、その穴が完成した頃に終戦を迎え、実際に使うことはありませんでした。

終戦の日は、当時の町長さんの家に集まり、ラジオで天皇陛下の玉音放送を聞きました。

実は、戦時中よりも戦後の方が、食糧や物資が不足して生活は大変だったんです。ただ、うちは父が魚屋だったおかげで、魚と物々交換してチョコレートやバナナをもらってくることができ、他の家庭よりは少し恵まれていたかもしれません。それでも食べるものがなく、白米に砂糖をかけて食べたこともありました。

父は自転車で、母は荷車を引いて、下西条や中西条、高出のあたりまで一生懸命に魚を売りに行っていました。生活がようやく安定してきたと感じたのは、私が中学校に入ってしばらくしてからのことです。

私は今でも、昨今の戦争のニュースを見ることができません。テレビで映像が流れると、辛くてすぐに消してしまいます。

「やられたら、やり返す」。その精神がある限り、戦争は決して終わりません。しかし、戦争は悲惨そのものです。私には当時の辛い思い出があるからこそ、今の小さな子どもたちがのびのびと遊んでいる姿を見るのが、何よりも好きなんです。

今の子どもたちは本当に幸せです。戦争は、日本だけでなく、世界のどの国であっても、絶対にやってはいけない行為なのです。

# 洗馬駅で見た紙吹雪 ～旅館の記憶とヤミ米を運んだ人々～

奈良井 宏美さん（昭和14年生まれ）  
塩尻市宗賀  
聞き取り日：令和5年3月2日

私がちょうど小学校に上がる前の年が、終戦の年でした。当時はまだ保育園などもなく、それまではただ家にいて過ごしていました。

私の家は、戦前から家業として旅館を営んでいました。戦後ももちろん続けていて、関西や名古屋のあたりから「買い出し」の人たちが大勢来て泊まっていましたね。富山からはお薬屋さん came たり、広丘にあるお茶屋さん（白川園さん）も昔からよく泊まりに来てくれていました。

親戚のおじさんは、もともと郵便局に勤めていたのですが、昭和19年に海軍の通信員として召集されました。その出征の時に撮った写真が今も残っています。おじさんは無事に帰り、最後は郵便局長まで勤め上げました。

小さい頃の記憶ですが、空襲警報や警戒警報が鳴ったことはうっすらと覚えています。うちには地下室があって、それを防空壕代わりにしていたんです。その地下室は今も残っていて、今は野菜置き場として使っています。当時は警報が鳴るたびに、その暗い地下室の中へ避難していました。

## <奈良井さん所蔵の当時の写真>



終戦の日のことは、ラジオの放送を聞いた覚えがあります。まだ小さかったので、難しい言葉の意味まではわかりませんでした。何か大変なことが起きているのだとは感じていました。

戦後は物資がなく、配給は宗賀小学校で行われていました。ただ、うちは学校から遠かったのも、いつも順番が一番最後だったのを覚えています。また、当時は伝染病も流行っていて、近くに隔離病棟がありました。両親から怒られる時に「言うことを聞かないと、隔離病棟に入れちゃうぞ!」と脅されたのも、今となっては懐かしい思い出です。

戦後の旅館には、遠方から「ヤミ米」を買いに来るお客さんが本当にたくさん泊まっていました。当然、警察も厳しく取り締まりをしていて、塩尻駅と洗馬駅の間には警察官が多々張り込んでいたんです。

私は小さい頃から電車が大好きで、頻繁に洗馬駅へ遊びに行っていました。そこで、警察に捕まる人をたくさん見ましたよ。買い出しの人たちも必死ですから、捕まらないようにグループの誰かが塩尻駅へ偵察に行くんです。そして、警察がいないとわかると、線路のカーブのところで「紙吹雪」をパッと舞わせて、仲間に「今は安全だ」と合図を送っていました。

着物の中に米を隠して忍ばせている人もいましたし、駅に警察がいるとわかって、もう一度うちの旅館に逃げ戻ってきて泊まる人もいました。生きるために、みんな必死だった時代です。

私が戦争というものを本当に理解できるようになったのは、小学校に入って色々なことがわかるようになってからです。その頃になってやっと、「日本は真珠湾攻撃をしたんだ」「こんな戦争をしていたんだ」という事実を理解しました。

私はまだ幼かったため、戦地へ行くことはありませんでしたが、実際に戦争を体験した大人たちは、本当に言葉では言い表せないほどの苦勞をしたのだと、心からそう思います。

## 闇船での脱出 ～朝鮮半島・海美からの命がけの引き揚げ～

米窪 交平さん（昭和9年生まれ）  
塩尻市堀ノ内  
聞き取り日：令和3年5月6日

私の父、木下達喜は下伊那郡の喬木村（たかぎむら）の出身で、18歳の時に朝鮮半島へ渡りました。各地を転々とした後、西海岸にある「海美（かいみ）」という町に腰を据え、そこで郵便局を開設しました。

私は昭和9年にその海美で生まれ、両親と兄の4人家族で暮らしていました。海美は海に近い田舎の集落で、日本人は20戸足らず。私たちの家だった郵便局は、面事務所（村役場）や2つの学校などと共に、周囲約1.8kmの城壁で囲まれた中にありました。

穏やかだった海美の生活は、昭和20年8月15日の敗戦を境に一変しました。私たち日本人の立場は逆転し、海美にいた日本人は朝鮮人の学校に集められ、軟禁状態に置かれたのです。幸い、密かに脱出した整備兵が軍に連絡してくれたおかげで、私たちは日本軍に救出されました。

その後、「釜山から引き揚げ船が出る」という情報が流れました。しかし父は、「国の言うことはあてにならない」と判断し、密かに知り合いの現地人を通して交渉し、闇船での脱出を計画したのです。

敗戦から1ヶ月後の9月16日の夕方。父の計画に賛同した在留日本人の3家族、合計12人が約束の海岸へ集まり、私たちは闇船に乗り込みました。

航海中は、闇船だと知られないよう、対日感情の悪くない港を選んで寄り、水などを補給してもらっていました。しかし、ある時のことです。対日感情が悪いとわかっていた「木浦（モッポ）港」には寄らないようにしていたのですが、船主の強い希望で立ち寄ることになりました。すると案の定、保安隊の若者に闇船だと見破られてしまったのです。

以後の航海は認められず、船は没収。私たち日本人は下船し、強制収容されるよう命じられました。絶望的な状況でしたが、船主が年配の保安隊員と必死に交渉し、そっとお金を渡してくれたおかげで、船は没収されず、私たちも奇跡的に釈放されたのです。

日本へ向かう海路は、まさに命がけてでした。台風にも見舞われました。玄界灘に出た時のことは忘れられません。小山のような巨大なうねり、吹き荒れる強風、そして恐ろしいほどに速い潮の流れ。ふと見ると、帆柱を切り倒されて流されていく別の船がありました。助けを求めて叫ぶ人々の姿が見えましたが、私たちの船も沈むかどうかの瀬戸際で必死だったため、どうすることも、助けることもできなかったのです。

出発から20日後の10月6日。私たちはようやく佐賀県の唐津港に入港しました。検疫を受け、10月10日に特別許可が下りて、ついに日本本土の土を踏むことができたのです。しかし、悲劇はその夜に起きました。唐津を猛烈な暴風雨が襲い、私たち12人を降ろした後、朝鮮半島へ戻る予定だった船主ら3人が乗った船が波に砕かれてしまったのです。2人は自力で泳ぎ着いて助かり、後に朝鮮半島へ戻っていましたが、私たちの命を救ってくれたあの船主は、帰らぬ人となってしまいました。

唐津では、臨時の収容施設から民家を借りて移り住み、私は唐津の国民学校へ転入しました。その後、父の生家から甥が迎えに来てくれて、私たちは両親の故郷である長野県の喬木村へと移りました。父の生家の一室に4人で身を寄せ、私は昭和20年11月に喬木第一国民学校の5年生に転入しました。そして昭和22年3月に卒業し、4月には新制の喬木中学校へ入学して、少しずつ新しい生活を歩み始めたのです。

私の生まれ故郷、海美は遥か彼方です。兄は洪城中学の同窓会の折に、海美を2度訪れました。帰ってきた兄は、「城邑内はすっかり変わってしまって、昔の面影はもうどこにもないよ」と寂しそうに言っていました。

私も高齢となり、もう海美の地を踏むことはできないでしょう。しかし、あの城壁に囲まれた穏やかな町並みと、命がけて海を渡ったあの日の記憶は、今も私の心の中に生き続けています。

編集・発行	塩尻市中央公民館
発行日	令和8年3月
お問合せ	塩尻市中央公民館